

## 遊び研究の現在

新たな出発へ

企 画：	中野 茂	（北海道医療大学心理科学部）
話題提供者：	田中 浩司	（福山市立大学教育学部）
話題提供者：	加用 文男	（京都教育大学教育学部）
話題提供者：	伊藤 良子	（東京学芸大学教職大学院）
話題提供者：	中野 茂	（北海道医療大学心理科学部）

### [企画主旨]

この数十数年の間を振り替えると、遊び研究の学術的報告も、学会発表数もどんどん乏しくなっていることは、学術雑誌に採択された研究数、本学会での発表数を経年的に見ると明らかです。新たなテーマが見いだせず、完全な行き詰まり状態に思われます。一方で、子どもの遊びへの根拠のない理想論化は延々と語り継がれています。この RT では、遊び研究の現状を正視し、問題点を洗い出し、いかに克服することができるか、新たな出発の可能性論じ合います。

### 【伊藤良子：情動的交流遊び】

ゆさぶり遊びやくすぐり遊びなど身体に直接働きかけて、子どもと大人との情動の共有を楽しむ情動的交流あそびは、対人・コミュニケーション発達にとって重要な役割のあることが明らかにされている。なんらかの発達の問題が疑われる子どもとその養育者を対象とした早期発達支援プログラムの中に情動的交流遊びが含まれていることが多い。あるクリニックで取り組んだ親子集団療育において、手遊びやリトミックなどの集団遊びにくらべ、母子が1対1で対面で行う情動的交流遊びでは、母親の情動表出や応答の柔軟性の問題が子どもの情動表出や応答性に強く影響することが観察された。そこで情動的交流遊びが子どもと大人との双方にとってどんな意味があるのか、検討したい。

### 【田中浩司：遊びの指導から発達理論を構想する】

ルール遊びは、少なくとも幼児期の間は、年長者（多くの場合保育者）が関わる事によって、はじめてその面白さが引き出される遊びである。このような遊びは、いわゆる「自由遊び場面」の観察のように、子どもだけで構成された遊び集団の中で、自然発生的に展開することは少ない。必然的に、これらの遊びの発達メカニズムを捉えるためには、保育者による遊びの指導を含めて理論化する必要がある。ところが、遊びの指導は、保育者によって大きな幅を持ち、容易に一般化できるようなものではない。本発表では、このような遊びの指導をふまえた発達理論の可能性について議論したい。

### 【加用文男：遊べる大人になるために遊ぶという遊び観への胎動】

古典的遊び論は効用論（グルース、ラザラスなど）と余暇論（スペンサー、ホイジンガ、カイヨワなど）に分類できる。発達心理学での効用論の典型は学校での教科的学びへの準備的理解、余暇論の典型は、〇〇遊びの時間（ごっこやルール遊びが多い）という活動領域的理解として現れる。他方、現代の労働環境論からすると、一方で過労死が話題になりつつも企業経営者たちが社員に遊ぶ力を求める傾向も生まれつつあるし、フリーター志向の若者たちも増えつつある。余暇論を越えて仕事や生活的場面にも遊びを求め始めているのが現代であろう。この底流胎動が子どもの遊び論にどのような変化をもたらさうか？

### 【中野 茂：遊びは「不確か」を楽しむ情動～新しいモデルへ】

遊びの「多様性モデル」(Sutton-Smith, 2011)「不確か性トレーニング」(Spink ら, 2001)が提出されているように、遊びは、行動の硬直を避けるために発達をした行動であり、可能世界を拡大する行動である。また、遊びが相反する情動を緩和する働きをしていることは、脳の情動関連部位に「遊びシステム」が見つかっている(Panksepp, 2005)ことから示唆されている。結局、遊びは可能世界を拡大する試みによって、日常生活を生き生きとした活動で、記憶に残るものにする働き(Fein, 1999)といえる。このことは、遊びの反対は“うつ”状態(Sutton-Smith, 2011)であることから考えられる。